
規格外品達が踊る舞台は

てんしん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

規格外品達が踊る舞台は

【Nコード】

N0874Q

【作者名】

てんしん

【あらすじ】

『請け負い屋』を営む神楽舞人^{カグラマイト}とその仲間達は、とある依頼により麻帆良学園へと向かう。そこで彼らを待ち受けるのは、英雄となることを望まれた少年とハチャメチャな少女たちとの出会いだった。本来の世界では居るはずのない規格外品達が役者に加わった舞台はどのような未来を描いていくのだろうか。

作者は特撮好きですので、特撮分が多く含まれています。

この作品はご都合主義、チート、ハーレム、原作破壊等が含まれます。また、ところによりアンチも含まれる可能性があります。

プロローグ（前書き）

はじめまして。偉大なる先達の皆様の作品に感化されて、思わず作成した作品を初めて投稿します。

まだ素人なので、幾つかお見苦しい点があるかと思いますが、どうか読んでいただければと思います。

この作品の注意事項

作者は特撮好きですので、特撮分が多く含まれています。

この作品はご都合主義、チート、ハーレム、原作破壊等が含まれます。また、ところによりアンチも含まれる可能性があります。

この作品にはTSキャラ、擬人化などの成分があります。

上記の点に注意してお読みください。

ブローグ

SIDE : MAITO II KAGURA

此処はイギリスのとあるマンションの一室。左右には壁一杯の大きさを持つ巨大な本棚があり、真ん中には二人用のソファアークが、テーブルを挟んで二つ置いてある。

そして、入り口の扉と、テーブルを挟んで反対側にある執務机に一人の少年が座っていた。肩まで伸ばした黒髪をゆるく三つ編みにし、顔には大きめの丸眼鏡が掛かっている。椅子に座っているのかわかりにくい、痩身ではあるものの、ひ弱さは感じられない。

彼は黙々と、今時右側にインク壺を置き、羽ペンを使って書類を作成していた。彼の左手側には作成終了したと思われる書類と、作成に使用したと思われる資料が、そびえ立つ塔のように積まれている。

KARIKARIKARIKARI.....

しばしの間、書類の上をペンが走る音だけが響く。

どの程度時間がたつたろうか、少年はペンをインク壺へと差し、書類を手に取った。その両の瞳を細め、じっと自らが綴った文字を眺める。

そして、

「よし、終わった」

問題がないことが確認できたので、ほっと息を吐き、背もたれへと体を預ける。

K n o c k , K n o c k

まるでそのタイミングを計っていたかのようにドアをノックする音が聞こえる。誰がいるかもわかっているので、どうぞ、と少年は何のためらいもなく許可を出す。

ゆっくりと扉が開かれ、黒を基調としたメイド服を身に着けた、夜闇のような黒と、雪のような白を有するセミロングの髪の少女が、ティーカップとポットをトレイに乗せて入ってきた。

「失礼します、舞人様。そろそろ終了されるかと思いましたが、紅茶を入れて参りました」

「ありがとう、詩音。いつも悪いね」

舞人と呼ばれた少年――カグラマイト神楽舞人は、詩音――クロホシオン黒星詩音に笑みを浮かべながら礼を述べると、

「いえ、これが私の仕事ですので」

詩音がいつものように口元を僅かに緩めた、涼やかな微笑みを浮かべる。これは二人の間でいつも行っている遣り取り。

「今回はいかがでしたか？」

「結構面倒そうだったけど、零^{レイ}を派遣したよ。というか、依頼内容を見せたら、止める間もなく飛び出して言っちゃったし」

舞人は、処理中の書類の束から一枚抜き出すと、詩音に渡す。

「確かに零なら行きそうですね」

私でも飛び出してしまいそうです、と詩音が呟く。

その書類に書かれているのは、とある村が竜種の子どもを不当に殺害した事件について書かれていた。

彼女の境遇と、それを知っている舞人などにしたら許容できる事件では無い。

「念話で状況の説明と注意だけはしたから、あとは何とかなと思う。まったく、自称『正義の魔法使い』は度し難いな」

おかげで請け負い屋の俺たちが仕事に困らないのは皮肉だけと呟きながら、舞人は詩音の入れた紅茶を口に含んだ。

『請け負い屋』

舞人が営む仕事であり、ベビーシッターから要人の護衛まで、ありとあらゆる仕事を請け負う仕事である。ただし自分の気に入った依頼のみという、何とも不安定な運営だが、依頼は後を絶たない。

それは何故か。

その鍵は『魔法使い』と『竜種』という言葉にある。

この世界には魔法が存在する。灯りを点ける、手を触れずに物を動かすといった魔法から、戦いのための魔法までそれこそ多種多様であり、大きな区分としては、西洋魔術、東洋呪術などが存在する。

そして、世界には魔法世界と現実世界（旧世界）がある。
△ンドゥス・マギクス △ンドゥス・ウェトウス

旧世界では魔法は秘匿されるべしものとして扱われ、魔法使い達はその力を一般人に見つからないようにしながら、世のため、人のために陰ながらその力を振るっていた。

そして、舞人達も魔法使いではないものの、彼らが住む世界にて活動をしている。一般的にはまとも依頼者を選ぶようでは生活していけないが、魔法と関わっていくとその限りではない。

まあ、それでも普通は難しいのだが、そこに『竜種』という鍵が加わる。

竜種、つまりはドラゴンなどの生物の総称のことを指す。

そして彼らは一般的に魔獣と呼ばれていた。

竜種ではないが、名の知られたものでは“八岐大蛇”“酒吞童子”“ベヒーモス”などの旧世界では神話上の怪物や神獣として語られる生物たち。

それらは古来より畏怖の対象とされ、人々の恐怖の対象としてあった。

常軌を逸した身体能力と超常の力を振るう姿は一種の天災。もしくは自然の象徴であり、遙か昔の魔法使い達は畏敬の念を持って接してきた。

しかし、時代は常に変化を求め、止まることを知らず、そして、無情であり非常なもの。

魔法技術が発達し、魔法具の開発・発展してきてからというもの、彼らの存在の意味、立場は変わってしまった。

畏怖し、敬うべき存在から只の生物。

………もしくは“害獣”へと。

相応の装備を調えた魔法使い達により、魔獣達はその住処を追われ、存在意義を失った。

中には害獣として不当に処理されるものたちも決して少なくなかった。

舞人達はそんな彼らの揉め事の解決を中心に請け負っている。

彼らは決して本能だけで生きる獣ではなく、知性も常識も持つ立派なこの世界の住人であった。

今でこそ、様々な人たちの努力により立場が見直されつつあるものの、今もなお不当に扱われる魔獣達は数多く、その殆どが魔法使いによってもたらされているのが現状である。

それを時には理詰め、時には武力を持って解決するのが舞人達。

「とりあえず、零がやり過ぎなければ良いけどね」

「まあ、そこは彼女の自制心に期待しましょう……たぶん無理でしょうが」

「だよなあ」

詩音の冷静に付け加えた一言に、思わず舞人は苦笑を漏らす。そして再び紅茶を口に含み、

「マ、ス、ター……!!!!」

B A N G ! ! ! ! ! ! !

慌ただしく扉を開いた音が聞こえたかと思った瞬間、赤い影が宙を舞い、そのまま鮮やかな伸身二回ひねりを決めると、勢いよく舞人の胸へ飛び込んだ。

「ぶふうう!?!!?!?!?!」

強制的に紅茶が吹き出される。その勢いも相まって、かなりの衝撃が舞人の胸を襲った。

「ごほっ、ごほっ……は、一姫、いきなり何するんだ!？」

咳き込みながら、自らの胸に飛び込んできた赤い影――赤と白の修道服で、燃えるような赤いショートカットの少女――アカホシハジメ赤星一姫を見ると、その翠色の双眸を期待の色に染めて、こちらを見上げていた。

彼女の二つだけ跳ねて外を向いている髪が、ピコピコと感情を示すように動いている。

「お仕事終わったんでしょ？　なら遊ぼうよ！！」

犬か、お前は、と内心思うが、それがこの子かと思い直す。何より、これほど懐いてもらうのは悪くない。むしろこんな美少女のスキんシップを嫌だと思う奴は男じゃないと思う。

……少し思考が逸れた。

「一姫、舞人様はお仕事を終えられたばかりでお疲れなのですから、今日は遠慮しなさい」

「え〜」

「え〜、ではありません」

見かねた詩音が一姫に注意し、一姫がそれに不満をもらす。それに対して詩音がさらに苦言を述べようと口を開いたとき、

《♪♪！！　♪♪♪ノ♪♪ヲ♪♪♪！！　♪♪デ♪♪♪ダ
！！》

着メロならぬ着音声が、舞人の懐から鳴り始める。音声からするとメールのようだ。舞人は一姫を膝の上に乗せたまま、愛用しているコートのポケットから器用にi - phoneを取り出と、受信メールを確認する。

内容に目を通しながら、自然と眉を潜めてしまふ。

「……」

自分の雰囲気の変化を感じたのだろう二人が、黙ってこちらへと視線を向けてくるのがわかる。

「……詩音、一姫」

「はい」「はい」

i - p h o n e を再びポケットへとしまつと、二人へとゆっくりと声を掛ける。

「仕事が入った。場所はとびきり面倒で、且つ嫌な場所で、しかもかなりの長期になりそうな奴だ。付いて来てくれるか？」

二人とも、今までずっと一緒に居てくれた。何度も喧嘩もしたし、お互いの好きなもの、嫌いなものも圧程度把握している。

だからこそ、依頼主の居るところに二人を連れて行くのは気が引ける。だれが好き好んで、家族を嫌がるところへ連れて行きたいと思うだろうか。少なくとも自分は思わない。

もし二人が嫌がるそぶりを見せたら置いていくつもりだ。二人とも、一人で十分生きていけるだけの知識と経験は積んでいる。問題はないだろう。

（いや、むしろ二人には残っていて欲しいのかもな）

無駄にストレスを感じる必要は無い。

そう思って二人へと視線を向けると……、

「何を今更」

詩音のいつもの澄ました顔に呆れた言葉と、

「勿論、付いていくよ!!」

一姫の普段と変わらない満面の笑みに元氣一杯の声が帰ってきた。

（二人とも、全く引く気無しか）

二人の瞳が、絶対付いていくという意志をはっきりと伝えてくる。その強固さを示すように、二人の視線は一切揺らぐことなくまっすぐ自分へと向かっている。

「……なら、すぐに準備を始めるぞ。出発は明日だ」

「はい」「うん!!」

二人は、自分の返事を聞くと、各々の準備のために、すぐさま部屋から出て行く。

「……」

そんな二人を見送ると、舞人も自分の準備のために部屋を後にする。

彼の受けたメールにはこう書いてあった。

《From: R & amp; L

Sub: 依頼

かなり面倒な事態が起きました。協力して欲しいことがあるので、こちらの事務所へと来てください。詳細はその時にお話しします。

住所：学園都市「麻帆良学園」

P・S・ 昨年は大変お世話になりました。そのお礼もしたいと思っています。楽しみにしていてください。私たち二人でサービスし

ますよw 勿論三人には内緒ですw》

（こんなこと書きやがって……喧嘩にならなきゃ良いんだけど、無理だろうな）

メールに書かれていた文面を見て、麻帆良学園に行ったときの苦労が思い浮かび、思わず溜息を吐く舞人だった。

第一話 R & Lとの再会／ようこそ、麻帆良へ（前書き）

プロローグを投稿してから、一気に作ったので、文章がおかしいかもしれません……。

第一話 R & Lとの再会 / ようこそ、麻帆良へ

イギリスから12時間機上の人となり、そこから電車を乗り継いで、やっとたどり着いた麻帆良学園。

明治中期に創設され、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた都市で、学園の中央に世界樹と呼ばれる、樹高270mの巨大な樹「神木・蟠桃しんぼく・ばんとう」があるのが特徴。

学園外とは比べものにならないほどの技術や、特殊能力者が存在するも、学園都市内全域に展開される認識阻害結界により、それを異常と感ぜられず、それによるトラブルも学園内にて活動する魔法使いやその関係者達により、表沙汰になることはない。

ここは関東魔法協会が存在する場所であり、神秘の秘匿については十二分に行われている。

「だからって、これはどういふ？」

前もって情報を入手していたとはいえ、目の前に広がる光景に対して、舞人は思わず呆然としてしまう。

D O D O D O D O D O ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !
 !

見渡す限り人、人、人。何処にこれだけの人がいたのかと思わせるほどの人が、駅のホームから、まるで鉄砲水のように流れ出ていく。

時刻は午前7時45分。ちょうど登校ラッシュの時間帯であり、ほぼ全てが学生である。

自分の脚で走るものや自転車は当たり前だが、バイク、キックボード、ローラーブレード、果てはスケートボードに乗った状態で路面電車に掴まる人までいる。

「すごいですね」

「うわゝ、人が一杯だゝ!!」

詩音はその光景に言葉を失い、一姫は逆にキラキラと瞳を輝かせている。両者の性格の違いが如実に表れていた。

「さて、メールではこの辺りで待ち合わせのはずなんだけど……」

舞人は周囲を見渡しながら、目的の人物達を探す。かなり人が多いが、件の人物達はかなり特徴的であるため、すぐ見つけられるはず。

そう考えていると、

「だゝれだ？」

突然柔らかく暖かい何かによって視界が覆われ、後ろから声を掛けられる。

その声には聞き覚えがあった。それは偶然別件でこの街に立ち寄ったとき、助力することになった二人の少女のうちの一人。

常に冷静沈着にあらうとし、しかし情を忘れない少女。

「翔子、君ももう高校生なんだから、こんなスキンシップはやめた方が良いでしょう？」

舞人は自らの視界を覆う少女の両手を優しく剥がすと、後ろを振り向く。

そこに立っているのは、麻帆良学園高等部の制服に身を包み、ソフト帽を被った少女――左翔子。ヒタリショウコ

そして、

「すまないね、舞人さん。彼女はまだまだ頭の中は子どもなんだ」

同じく麻帆良学園の制服を纏い、その手には黒塗りの分厚い本を持つ、理知的な雰囲気ヒトリの少女――リンス。

「なによ、リンス。あなただって、舞人さんが来る時間が近づいてきたらそわそわしてた癖に」

「な、何をいうんだ、翔子。僕は至って普通だよ、うん」

「はは、二人とも元気そうで良かった」

仲良く言い合いを始める翔子とリンスを見て、舞人は少しだけ安心した。それは二人のどちらかが欠けたという噂を聞いていたため。

だが、そんな心配はいらなかったようだ。人知れず安堵の溜息を

吐く舞人。

しかし、

「舞人様、どういうことか、説明していただけますか？」

「マスター、全部話してくれるよね？」

後ろからドス黒いオーラを感じ、恐る恐る振り返る。

そこにいるのは、背筋が凍るほどのオーラを放ちながら、半眼でこちらを見つめる詩音と、笑みを浮かべているものの、そこからは冷気が迸っている一姫。

心なしか、彼女たちの周りを通行人達も避けているような気がする。

「あ、ああ。と、とりあえず翔子。お前達の事務所に案内してくれ」

何故二人が怒っているのか分からない舞人は、ひとまず場所を変えべく、翔子に案内を頼むことにした。

少年達移動中……………

「成る程、彼女たちが今回の依頼人だった訳ですか……」

舞人達五人は、ひとまず場所を変えるべく、翔子とリンスが営む探偵事務所へと移動した。移動の道中、舞人は詩音と一姫の冷たい視線に晒され続けていたが。

そして、事務所に到着し、翔子達から自分たちが依頼人であることを告げられることで、二人ともひとまず納得する様子を見せた。

「さて、翔子、リンス。そろそろ今回の依頼の内容を聞かせて欲しいんだが」

先ほどまで詩音たちの視線にタジタジだった舞人だが、すぐに表情を引き締める。

彼女たちの力量は相当なものだ。だからこそ、彼女たちが自分たちに依頼する――つまりは助けを求めてくるということは、かなりの非常事態であることを示すと、舞人は判断している。

「うん、これを見て欲しいんだ」

翔子とリンスも真剣な表情となり、机の上にある物質を置いた。

それはパソコンの記憶媒体として用いられるUSBメモリに酷似した形状をしており、舞人にも見覚えのあるものであった。

「ガイアメモリ!？」

舞人はそれを見た瞬間、反射的に驚きの声をあげる。

ガイアメモリ。

「地球の記憶」と呼ばれる、地球上で記憶されたあらゆる情報を力に変えて封じ込めたメモリスティック。

コネクタを介して使用することで、使用者を「ドーパント」と呼ばれる超人へと変化させる悪魔の道具。使用者にはメモリの毒素が残り、様々な副作用に襲われる危険性を秘めている。

「何でこれがまだ残ってる!？ あれは俺たちとお前たちで協力して、プラントごと破壊したはずだ!！」

舞人は思わず、座っていたソファから腰を上げ、声を荒げてしまった。

「そう、プラントごと破壊した、そのはずだった」

「あ………すまない」

リンスが辛そうに目を伏せたことで、冷静になる。彼女にとって、その時ののはあまり思い出したくない記憶のはず。

ばつの悪さを感じながら、とりあえずソファーへと座り直し、深呼吸して高ぶった感情を落ち着けることに努める。

自分が落ち着いたのを感じたのか、翔子が再び話し始める。

「あの園崎家での戦いの後すぐに舞人さんは帰っちゃたから知らないだろうけど、あの後ミュージアムを継ぐものと名乗るEXE^{エクセ}と名乗る集団が出てきたんだ」

「彼らがガイアメモリの流通をしていることを知った翔子は、そのアジトを突き止めて、EXEを壊滅させた」

「でも、その後の調査で、彼らは流通をしていただけで、製造までは行っていないことがわかったんだ」

「ということは……」

翔子とリンスの言葉に、舞人の脳裏には嫌な予感を覚えた。それは当たって欲しくないことであり、

「そう、ガイアメモリ犯罪は、まだ終わっていない」

「それも、『ミュージアム』よりも遙かに強大な組織がバックに付いている」

彼女たちから告げられる事実は、嫌な予感を裏付けるものであった。

「ということは、俺たちへの依頼というのは、今後発生するであろうガイアメモリ犯罪への対処と、背後に居るであろう組織の捜査へ

の協力、といったところか？」

「そういうことになるね。……どうだろう、舞人さん。この依頼、受けてもらえないだろうか？」

「……」

リンスの言葉に、舞人はしばし沈黙する。

ガイアメモリ犯罪の凶悪さは身を以て知っている。だが、詩音と一姫をそれに巻き込んで良いものか、非常に悩む。

只でさえ、敵地と言っても良いほどの場所に来ているのだ。あまり彼女たちに心労を掛けたくはない。

「僕は良いと思うよ、マスター」

「私も一姫と同意見です、舞人様」

そんな舞人の苦悩を知ってか知らずか、一姫と詩音が肯定の意見を述べた。

「舞人様はきっと、私たちのことを考えて、返事を浚っておられるのでしょうか」

「でも、僕たちには力があって、それで誰か泣いている人を助けることができる」

「であれば、私たちに否はありません」

「「それが、舞人様マスターがやりたいと願うことであるならば、私たちが僕やりたいことになるのですから」

舞人は思わず二人の顔を見つめる。彼女たちの瞳には否定的な感情は見られない。むしろ、やる気に満ちあふれている。

（何か、詩音たちに助けられてばかりだな、俺）

どうやら自分は弱気になっていたらしい。あの、最強のドーパントのイメージが未だ残っていたからだろうか。

「……ふっ!!」

そんな自分を吹き飛ばすべく、両手で思いっきり頬を叩く。小気味良い音が事務所内に響いた。

覚悟は決まった。

「ああ、その依頼、受けよう」

今度こそ、ガイアメモリ犯罪を無くすために、そして、この街に住む人々のために力を振るおう。

「良かった、これからよろしく、舞人さん」

「よろしく頼むよ、舞人さん」

「「そして、ようこそ、麻帆良へ!!」」

不安げな表情を浮かべていた翔子とリンスが破顔し、こちらへと

握手を求めてくる。それに対し、こちらも手を出し、しっかりと握りしめた。

「こちらこそ、よろしく頼むよ、二人で一人の探偵さん」

ここに、影ながら麻帆良を救った、二人で一人の守護者と、『請け負い屋』は再会を果たし、再び絆は結ばれた。

潜む闇は深く、そして暗いが、彼らならきつと切り裂いてくれるだろう。

「ところで、舞人さん。依頼料のことなんだけど……私たちの体で
払おうかと思うんだけど……ど、どうかな？」

「ああ、これで僕たちは名実ともに舞人さんの恋人になれるんだね
……ふふっ、ソクソクするね」

「「ちょっと待て!!!!!!!!!!!!!!」」

たぶん。

第二話 W出演／闘いの鐘（前書き）

少し時間が空きましたが、第二話投稿します。

またネギま！？の登場人物は出ませんでした。

そして、今回翔子とリンスの正体が明らかになります。

えっ？ バレバレ？ それは失礼しました。

P V 2 , 0 0 0 突破、ユニーク 5 0 0 突破しました。 ありがとう
とっとうざいます。

第二話 W出演／闘いの鐘

ここは麻帆良学園都市の外れにある森の中。

そのとある場所に、明らかに人工的に丸く開かれた場所が存在していた。他は数多の樹々により太陽の光は遮られて薄暗いが、そこだけは木々が全て、切り株さえも取り除かれている。

そんな場所に、ある男女の集団が、二組に分かれて向かい合っていた。

「翔子、本当にやるのか？」

その中で唯一の男である舞人は、妙にやる気満々で構えている翔子へと声を掛けた。舞人に見れば、疲れるだけであまり気乗りはしない。

「勿論！！ もう止まらないよ！！……それに、あれから私たちがどれだけ成長したか、舞人さんに見せてあげれるし」

「……言っても無駄か。リンス、君は？」

既にトップギアな彼女に何を言っても無駄だろうと考え、一縷の望みを掛けて相棒のリンスへと問う。

「無理だね。ここまで来たら一度ガス抜きの方が良い。そして、別れたときから僕たちがどれくらい変わったのか見て貰える機会を

逃す手は無いしね」

いつもならストッパーとなるリンスすらやる気である。

思わず舞人の口から溜息が漏れる。

「舞人様、お気になさらず」

「気にしないでよ、マスター」

疲れた様子を見せる舞人に、後ろにいる詩音と一姫が声を掛けてきた。

「私たちは絶対に負けません」

「僕たちの活躍、ちゃんと見ててね」

翔子達に相対する詩音と一姫も、全身から溢れ出る闘志をを隠そうともせず、既に臨戦態勢に入っている。

もう闘いが避けられないことを悟り、舞人は肩を落とす。しかし、やるべきことだけはやらなければいけない。

のろのろとやる気の欠片もない動きで懷に手を入れると、球体の上下に四角錐が二つ付いた道具を四つ取り出す。

これは、舞人が作った魔道具。四つを結んだ範囲内に認識阻害と人払いの効果を持つ結界を展開するもの。

それを円上の広場に対して、できるだけ広くなるように設置し、

起動させる。

それらが宙に浮き、回転をし始めると、範囲内に結界を展開するのを確認すると、そのまま、翔子、リンス組と詩音、一姫組とある程度距離を開け、

「もう好きにしてください……」

そう力なく呟き、項垂れた。

f
e
w

h
o
u
r
s

a
g
o
.
.
.
.
.

「ところで、舞人さん。そろそろその二人のことを紹介して欲しいんだけど？」

舞人達は、翔子とリンスの運営する探偵事務所で依頼を受諾し、依頼料などの金銭、待遇関係での相談を行った。

翔子、リンスの一言で多少揉めるも、結局金銭でとなり（当たり前だが）、必要な諸経費抜きの価格を受け取る形で決着が付いた。

勿論、価格はかなり勉強した……諸経費は自分たちで支払うので、むしろ赤字である。詩音と一姫が冷めた視線を向けてくるのがかなり辛かったが、知り合いから、しかも高校生から、高額請求するなど、舞人にはできない。

そんな遣り取りの後、翔子が唐突に切り出してきた。

確かに、舞人が以前翔子達と出会ったときは二人を連れていなかったため、初対面だ。詩音たちからの圧力と、ガイアメモリのインパクトが強すぎて完全に失念していた。

「そういえば初対面だったな。それじゃあ、詩音と一姫、二人に自己紹介してくれるか？」

「分かりました」

「はい」

舞人の言葉に素直に応じる二人。

だがコレがそもその間違いだったと、後になって後悔すること

になる。

「では、まず私から。名前は黒星詩音。クロホシシオン好きなことは料理と掃除、そして、“舞人様のお世話”です。今後ともよろしくお願いいたします」

「ってオイ……」

「次は僕だね。名前は赤星一姫。アカホシハジメ好きなことはマスターと一緒に遊ぶこと。好きな場所は“マスターの膝の上”よろしくね!!」

「ちょっと待て、二人とも……」

さらりと爆弾を投下する家族同然の少女達に、思わず制止の声を掛ける舞人。違う、何かは分からないが、いろいろと間違っているのは分かる。

「舞人さん……」

「どういうことかな？」

詩音と一姫が投下した爆弾の火が、翔子とリンスへ引火する。彼女たちと再会したとき、詩音と一姫から向けられたものと同種の圧力を持った視線が、舞人へと向けられる。

一瞬、二人の瞳が単色になったのは気のせいだと思いたい。

「いやいや、二人は……」

「舞人様は私たちの“大事な”方です」

「そして、僕たちはマスターの盾と矛。僕たちが傍にいる限り、マスターには傷つけさせないよ……あなたたちには出来ないだろうけどね」

慌てて補足しようとする舞人を遮るように、詩音と一姫が火に油、いや二トロを躊躇いなく投下した。

何故か詩音は誇らしげに微笑んでおり、一姫は夢と希望が詰まった豊かな胸を張って威張っている。

一瞬だけ、詩音と翔子、リンスから一姫に対して殺気が向けられたのは気付かないふりをした。

「聞き捨てならないね。一姫ちゃん、だっけ。誰に、何が出来ないって？」

翔子が頬をひくつかせる。口調は優しく、笑顔ではあるが、その瞳は全く笑っていない。

「私たちのことをほとんど知らないのに、よくそんなことが言えるね」

普段は冷静沈着なリンスも、一姫のこの台詞は流石にスルー出来なかったようだ。表情そのものはクールに澄ましているが、瞳には若干だが怒りの色が見える。

これは非常に拙い。これから協力していこうというのに、仲違いしては話にならない。

「おい、一姫。二人の実力は確かだ。それは俺が……」

「いいよ、舞人さん」

詩音と一姫なら自分の言葉である程度納得してくれるはず、そう考えて口を挟んだ舞人の言葉を、翔子が遮った。

「場所を変えよう？　そこで私たちの力を見せてあげる。……そして、さっきの言葉を訂正させてみせる！」

「ちょ、ちよつと待て、翔子。何を言つて……」

「私は翔子の考えに賛成だよ、舞人さん」

「リンスまで……」

いつもなら暴走する翔子を諫めるはずのリンスの、推し進めることを推奨する発言に、舞人は驚きを隠せない。思わずリンスの顔をまじまじと見つめてしまう。

「私たちが一姫さんの立場なら、いくら舞人さんのお墨付きがあるとはいえ、突然現れた私たちの実力に疑いを持つのは当然だ。なら、どうするか。答えは簡単だ。実力を見せてあげたらいい。それでお互い納得できる」

視線を一姫と詩音に固定したまま、リンスはそれに、と続け、

「私たちも、ただ舞人さんの傍に長く居ただけの彼女たちの実力に疑問があるんだ。互いの不和を無くすのに、これはもってこいの機会と言える」

「リンスのいう通りだよ、舞人さん。さあ、行こう。案内するよ」

それだけ告げると、翔子とリンスは席を立ち、さっさと出入り口へと向かう。

「わかった。行こう、詩音」

「ええ。……舞人様も、あまり遅れないよう、お願いいたします」

一姫も先に立った二人を追いかけるように席を立て歩き出し、詩音はこちらへ一礼した後、翔子達を追って事務所を出て行った。

結局事務所には、あまりの展開の早さに頭を抱える舞人のみが残された。

「……ったく、ちょっと待て、お前達!!」

このままここに居ても、どうしようもないのは明らかである。半ばやけになりながら、舞人も彼女たちの後を追って事務所を後にした。

．
The time to the present．．．．．

向かい合う翔子達と詩音達。

まず動いたのは詩音達だ。詩音が舞人の横へと移動し、一姫がその場に残る。

どうやら、まずは一姫が相手をするつもりのようなのだ。

「先手は譲ってあげる。さあ、いつでもどうぞ？」

そのまま一姫は半身になり、手の平を上に向けて二度曲げ、翔子達へ掛かってこいと徴発する。その顔には不適な笑みが浮かんでおり、貴女たちなど相手にならないと、翔子達へ無言で語っていた。

「そう。……私がこれからその台詞を後悔させてあげる。……いや、私たちが、ね」

しかし、翔子はそれに対して激昂するでもなく、そつと懐へと手を差し入れた。

そして取り出すのは赤い機械―ダブルドライバー。何かを差し込むスロットが二つ付いているそれを、慣れた手つきで腰へ取り付ける。

すると、ダブルドライバーからベルトが飛び出し、翔子の腰へと装着された。

「そうだね、翔子」

同時に、リンスの腰にもダブルドライバーが、装着された状態で出現する。

そして、二人は同時にあるものを取り出す。それは、先ほど事務所で見たものと同種のもの。

「あれは……ガイアメモリ？」

傍に立つ詩音の、驚いた様な呟き。彼女たちと相対する一姫も、その表情に僅かに警戒の色を滲ませたのが分かった。

それに応えるように、二人は左右対称のポーズを取ると、同時にガイアメモリのスイッチを押す。

『Cyclone』

『Joker』

リンスの持つ緑の『C』と書かれたメモリ―サイクロンメモリと、翔子の持つ黒のメモリ―ジョーカーメモリが起動し、音声を発する。

それぞれのメモリに内包された『風の記憶』と『切り札の記憶』が、その力を発動させる。

「「変身」」

二人の叫びが唱和し、リンスがサイクロンメモリをダブルドライバーの右のスロットへと装填する。

すると、リンスのベルトからメモリが消え、同時にリンスが気を失い、その場に倒れた。

そして、消えたメモリが翔子の右のスロットへと出現し、翔子はそれを左手で装填、右手で持つジョーカーメモリを左のスロットルへ装填し、『W』の文字を描くように開く。

『Cyclone Joker』

ダブルドライバーから音声と共に、風と技の旋律が鳴り響き、猛烈な突風と共に翔子の体に鎧が装着される。

右半身が緑、左半身が黒の姿を持ち、首元から銀のマフラー型の『ウィンディスタビライザー』が飛び出す。

これが、翔子とリンスの力。

過去、幾多のガイアメモリ犯罪を解決するため、街を泣かせる怪人達と戦うため、幾度となく『変身』した姿。

「「私たちは、仮面ライダー^{ダブル}W」」

違う世界でも、自らの信じる正義のために戦い続け、この世界でも己が信じる正義のために戦う英雄^{ヒーロー}。

「さあ、貴女達の想いの数を数えろ！！」

Wは左手を一姫へと突き出す独特のポーズを決めると、そのまま彼女へと駆け出した。

ここに、二人で一人の仮面ライダーと、赤い少女との闘いが始まった。

この闘いが彼女たちにもたらすのは、新たな絆か、それとも災厄の鐘だろうか。

t o b e n e x t s t a g e

第二話 W出演／闘いの鐘（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

翔子とリンスについて、この後に記載しますので、興味がありましたらお読みください。

今回はWと一姫の戦闘です。場合によっては詩音も参戦するかも。

それでは、また次の機会にお会いしましょう。

キャラ設定

1・左翔子 ヒタリシヨウコ

名前から分かるように、『仮面ライダーW』の主人公の一人である『左翔太郎』の並行世界での同一存在。性別以外は性格等基本的に一緒。それを活かしきれるかは作者にも分からない。

外見イメージは『アリアンロッド・サガ リプレイ デスマーチ』の紅一点『アキナ・ブルックス』を黒髪にして、少し成長させたもの（理由：アキナが15歳に対し、翔子は高校生〓16歳であるため）。作者はアリアンロッドシリーズが大好きです。

基本的に『仮面ライダーW』と同じ歴史を通っているが、舞人〓オリキャラが絡んでいるので、正史の翔太郎とは若干考え方が異なる。それは今後の展開で明かされる……はず。

2・リンス

上記と同じく、『仮面ライダーW』の主人公の一人『フィリップ：本名園崎来人』の並行世界での同一存在。翔子と同様、性別以外は基本的に同じ。活かしきれぬかも同様。

外見イメージは『アリアンロッド・サガ リプレイ ブレイク』の紅一点『ナシア・アガルタ』。同じようなベレー帽を被っている。リンスの名は『Intelligence』から。フィリップはWの『知性』担当ですし。

正史同様、ガイアインパクトによる消滅を経て、この世界に帰ってきている。その事実を舞人は知らないし、リンス自身も語る気はない。今、無事にこの世に存在しているのだから。

その他は随時更新します。後日キャラ設定として新規で作るかも。

第三話 Wとの闘い／乱入者は……魔法少女？（前書き）

筆が乗って、第三話完成したので投稿します。

今回は仮面ライダーWと、一姫の戦闘シーンがメインです。

それではどうぞ、ご覧ください。

PV：4 / 439アクセス ユニーク983人、ありがとうございます。
ます。

いつの間にか、こんなに伸びてて驚いています。

第三話 Wとの闘い／乱入者は……魔法少女？

S I D E : M a s k e d R i d e r W / S y o u k o H

「さあ、貴女たちの想いの数を数えろ！！」

Wへと変身し、いつもとはちょっと違う台詞とポーズを決める。
今回は犯罪者が相手ではなく、舞人さんの仲間が相手だ。流石にいつもの台詞を言うのは憚られた。

(いくよ、翔子)

(うん、私たちの力、見せてあげよう！！)

相棒のリンスの言葉に頷き、そのまま一姫ちゃんの方へと駆け出す。彼女も何かを感じたのか、挑発の姿勢から胸の位置まで腕を上げ、本格的な構えを取った。

だが、もう遅い！！

「はああああ！！！！」

裂帛の気合いと共に跳躍し、渾身の跳び蹴りを放つ。風の記憶を宿すサイクロンメモリによって加速されたこれは、相手がドーパントであっても怯ませるほどの威力を持つ。

一姫の腕がクロスされるが、

（そんな防御、打ち抜いてやる！！）

そのままウインディスタビライザーで風を起こし、更に加速して突撃する。

直撃。

その瞬間、短くとも密度の濃い戦闘経験から、手応えが変わったのをW / 翔子は感じた。

目の前で一姫が、予想より軽い手応えにも関わらず、まっすぐ後ろへと吹き飛んでいく。

（やるね、あの娘）

（私たちのあの蹴りを、あんな方法で受けるなんて）

W / 翔子はインパクトの瞬間、受け止めきれないと判断するや否や、一姫が後ろへと跳躍したのをしっかりと感じ取っていた。

とてもじゃないが、人間業じゃない。

（どうやら彼女たちも訳ありのようだね）

（ちょっと甘く見てたね）

W / リンスの言葉を裏付けるように、吹き飛んだ一姫が、そのまま空中で一回転し、何事も無かったかのように地面へと降りた。

跳び蹴りを受けた腕を擦っているところから、まったく効いていない、という訳ではなさそうだが、十分なダメージを与えたと言
い難い。

油断無くW / 翔子も構える。

「成る程。マスターが保証するだけの事はあるみたいだね。ちよつと油断が過ぎたみたい」

一姫が腕を擦りながら、ゆっくりと歩いてくる。

「そしてごめんね。僕は貴女たちを今まで侮ってた。あのときの“力にならない”って発言は撤回させてもらうよ」

「それはどうも」

「だから……ここからは僕も本気で行くよ」

「いいよ、私もこのままじゃ物足りなかったし」

距離にして約5メートルほどの地点で一姫が立ち止まる。その瞬間、はつきりと感じられる彼女の闘気。

体を突き刺すような鋭いそれを受け、思わず震えが来る。

だが、恐怖ではない。

それは歓喜。舞人さんの、自分たちがお世話になったあの人の隣に立つ少女に、少しでも認めて貰えたことで、彼に一步近づいたと

いう証となったことに対する喜びの震え。

握った拳を一度解いて、改めて握り直し、再び一姫へと向かって駆け出す。

切り札の記憶を内包するジョーカーメモリからもたらされる格闘技の記憶から、リンスが検索し、選択したそれを感じ取りながら、その距離を詰める。

しかし、さすがに今度は一姫も黙って待ってはいなかった。

こちらが駆け出した瞬間、ほぼ同じ速度でこちらへと突撃してきたのだ。

W / 翔子の頭に浮かぶ、回避と迎撃の選択肢。

いつもなら受け流すのだろうが、

（ここで引いちゃ駄目だ！！）

それは彼らの仲間になるために、そしておそらく恋敵^{ライバル}であろう彼女達と同じ土俵に立つために。

（（私たちは引く訳にはいかないんだ！！））

そのまま勢いを乗せて、左ストレートを放つ。

同時に一姫から放たれる、左のハイキック。

一姫と視線がぶつかり合う。

B A G G ! ! ! ! !

互いが放った打撃は、Wの一撃は一姫の左手に受け止められ、一姫のハイキックはこちらの右手で受け止める。

それに一瞬安堵した瞬間、一姫の左脚が弧を描くように跳ね上がった。

すぐに右脚を放し、それを受け止める。

しかし、話した右脚が地面に付くや否や同じように跳ね上がった。咄嗟に捕まれた左手を振り解き、その場でバク転することで回避する。そして、地面に着地すると、そのままバックステップ。一姫と距離を置いた。

「やるね、今のは決まったと思ったんだけど」

「一姫ちゃんこそ、とんでもない動きじゃない」

軽口をたたきながらも、W / 翔子は内心舌を巻いていた。一姫の身体能力は人の域を軽く超越している。

インパクトの瞬間、後ろに引いてダメージを軽減するくらいなら、麻帆良中のデスメガネとか、武道四天王ならこれくらいやってやれ

なくはないだろう（特に糸目の似非忍者）。

だが目の前の彼女は、ガイアメモリを使っている訳でも、気や魔力を纏って強化している訳でもなく、“ただ単純な身体能力のみ”で、あんな動きをしている。

少なくとも、近接戦闘は分が悪そうだ。

そう判断すると、W / 翔子は新たなメモリを取り出し、起動させる。

『Trigger』

青いメモリートリガーメモリから起動音が発せられたのを確認すると、すぐにドライバーを元に戻し、ジョーカーメモリを引き抜くと、代わりにそれを装填し、再度ドライバーをW型に開いた。

『Cyclone Trigger』

ドライバーにメモリが読み込まれ、風と銃撃手の旋律が流れると同時に、Wの左半身が黒から青へと変わり、左胸に青いエネルギー銃―トリガーマグナムが出現する。

W / 翔子はそれをすぐさま握りしめると、一姫へと向かって引き金を引いた。

サイクロンメモリにより得た疾風の弾丸で敵を打ち抜く風の銃撃手『仮面ライダーW サイクロントリガー』。

威力と命中精度にやや難があるが、かわりに広範囲に連続で弾丸

を放つことができる。

G A G A G A G A ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

放たれた疾風の弾丸は、狙い通りに一姫の方へと向かい、

「なるほど、そうやってメモリを換えることで、いろんな状況に対応してるわけだっ!!」

一姫に対して直撃する進路のものだけ、一姫の拳によって打ち払われた。

「ちょっと、冗談でしょ?」

ドーパントとの闘いで、多少のことになら驚くことも無くなっていたが、流石にこれには驚嘆を禁じ得ない。

「そうでもないよ、結構どころか、かなり手が痛い」

風を打ち落とした両手を振りながら、失敗したと一姫が零す。

ありえない。常識外も良いところである。

自分も常識外の一人であることを棚上げして、W / 翔子は胸の内で毒づく。

「なら、どこまで受け止められるかな?」

W / リンスがWの右半身を動かしてドライバーを動かし、サイクロンメモリを取り外し、黄色いメモリを取り出し、起動させた。

『Luna』

そしてそのままドライバーへ装填し、再びW型へと変形させ、メモリを読み込ませる。

『Luna Trigger』

幻想と銃撃手の旋律が唱和し、Wの右半身が緑から黄色へと変化する。

それにより、リンスの意図を把握した翔子は、すぐさまトリガーマグナムの引き金を引き絞る。

そして、銃口から放たれるのは黄色と青の弾丸。

それは、およそ通常の弾丸ではあり得ない不規則な軌道を取りながら、一姫へと殺到する。

『仮面ライダーW ルナトリガー』

幻想の記憶を内包するルナメモリの持つ超常的な力で弾丸を曲げ、必ず敵を打ち抜く幻想の銃撃手。

「くっ!？」

そこで初めて一姫が積極的後退の姿勢を取った。

弾丸の包囲網が完成する前に素早くその場から離れる。

全方位からの弾丸を捌くのは無理と判断したのか、それともこれ以上腕で払うのは無理と思って回避を選んだのかは分からないが、

「逃がさないよ!!」

だが、幻想の弾丸は止まらない。更に軌道を変化させ、一姫へと追いつがる。

「はあああ!!!!!!」

再度一姫がその拳を振るう。人智を超えた速度で振るわれるそれは、飛来する全ての幻想の弾丸を地面へと叩き付ける。

「っ……」

しかし、その代償は大きかった。

疾風の弾丸に続き、幻想の弾丸を打ち払ったその拳からは血が滲み、これ以上振るえないことを如実に表していた。

これは実践ではない。互いの实力を見るための試合に近いものである。その点から言えば、一姫は戦闘できないと見なせる状態である。

だが、W / 翔子はトリガーマグナムの銃口をまっすぐ一姫へと向けたまま動かない。

ドーパント、そしてNEVERとの闘う内に自然と身についた直

感が、一姫がまだ戦闘不能になっていないことを訴えていた。

「ここまでダメージを受けたのはいつ以来かな……想像以上だったよ」

血が溢れる両の拳をだらりと下げ、一姫が構えを解いた。溢れんばかりに放たれていた闘気が収まる。

それを見て、W / 翔子もトリガーマグナムを降ろし、変身を解除した。

「全力を見せてあげられないのは残念だけど、これ以上やると趣旨から外れそうだし、貴女たちがマスターを守るだけの力を持っていることも分かったし……良いよね、詩音」

一姫は腰に付けたポーチから包帯を取り出し、器用に両手に巻き付けながら、詩音に問いかける。

「ええ。貴女と互角以上に戦ったのですから、文句の付けようがありません」

詩音の肯定の返事に、一姫がこちらへと歩み寄り、包帯を巻いた右手を差し出してきた。

「これからよろしく、翔子さん、リンスさん」

「うん、こちらこそよろしく……手、傷つけちゃってごめんね」

翔子も、実力を試すためとはいえ、傷つけた彼女の手を労るように優しく握る。

「大丈夫、気にしないで」

一姫の屈託のない笑みに、それ以上謝罪を述べるのは無粋だろう。

翔子はそう判断すると、舞人にも声を掛けようと彼の方へと顔を動かし、

「二人とも伏せなさい!!」

突然発せられた詩音の叫びに、反射的に地面へと伏せる。

伏せる寸前に視界へと入ったのは、こちらへと駆け出す舞人の姿。

そして、次の瞬間にはその視界に影が落ち、甲高い破碎音と、周囲の地面が凍り付いていく光景が目に入った。

顔を上げると、舞人の側に立っていたはずの詩音が、いつの間にかすぐ傍にまで来ており、更に視線を動かせば、舞人がリンスの前で、以前にも見たことがある魔導具によって障壁を展開する姿が見えた。

そして、詩音の向こうの空に立つのは、宙に靡く金色の髪。

「さて、あの強力な反応が一つ減っているのは残念だが、その見知らぬ三人、少し放しを聞かせてもらうぞ？ 大人しくしていれば、命までは取らない」

金色の髪を持つ、黒いマントを纏った少女が、先ほどの一姫に匹敵する圧力を発しながら、こちらを見下ろしている姿があった。

これが、魔法使いと規格外品達の初めての出会い。

この出会いが、これからの未来にどんな影響を与えるのだろうか。

t o b e n e x t s t a g e

第三話 Wとの闘い／乱入者は……魔法少女？（後書き）

どうも、作者のてんしんです。

読者の皆様、『規格外品達の踊る舞台は』第三話、いかがだったでしょうか？

昨日投稿した後から妙に筆が進んで、何とか今日中に仕上げる事が出来ました。

やはり戦闘シーンは書いていて面白い……難しいけど。

そしてWはメモリの入れ替えの動作の表現が大変です。

今回は、乱入してきた金髪の魔法よう……ゲフンゲフン、少女との戦闘が入る……予定です。

明日から仕事が始まるので、今までの様には更新できないかもしれませんが、頑張って書きたいと思います。

それでは、本日はこの辺で失礼します。

ご意見、ご感想、リクエストなど随時募集していますので、よろしくお願いします。

第四話 Eとの遭遇 / 魔法使いとご対面（前書き）

前回投稿から2週間たってしまいましたが、何とか作成できました。
かなり難産でした。リアルで仕事が忙しかったのもありますが。

それではどうぞ、ご覧ください。

PV：7 / 238アクセス ユニーク1 / 663人、ありがとうございます。
ざいます。

これからも頑張りますので、よろしくお願いします。

第四話 Eとの遭遇 / 魔法使いと対面

SIDE: EVANGELIN

その日、エヴァンジェリン・A・K・マクダエルはいつものように屋上で横になっていた。もう中学生を15年も続けていては授業をサボりたくもなる。多小教師やカリキュラムが替わろうと、内容など諳んじられるほどだ。

だから、よくこうやって屋上に来ている。

出られはしない。

麻帆良学園は彼女にとっての檻。

彼女を縛り付けるこの『呪い』登校地獄さえ無ければ、今すぐにでもここから離れるというのに。

退屈という名の毒が、彼女の体を、しづう精神を侵していく。

（だが、そんな生活も今年で終わりだ）

今年、『紅き翼』の英雄で『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドが、魔法学校の卒業課題で教師として赴任してきた。

（あいつの息子の血を吸い、この呪いを解く。それが私の計画）

ネギが都合良く私のクラスの担任となったことで、少しの間、観

察することができた。

結論。ただの子供^{ガキ}。

確かに新米魔法使いの割には知識もあるし、その身に宿す絶大な魔力には目を見張るものがある。

だが、それだけだ。

魔法使いとしての意識は低く、その考えも幼い。魔法使いは全て善人であり、世の悪意など欠片も知らない。経験も浅く、魔力を封印された今の私でも、十分勝つことが出来る。

しかし、襲うのは今ではない。

直に来る満月の夜。わざとクラスメイトの血を吸い、彼を誘い出して襲撃し、その血を吸わせてもらう。そのために、『桜通りの吸血鬼』の噂を広げている。

『正義の魔法使い』である彼ならば、必ず食い付いてくる。

(ククク……)

今から笑いが止まらない。もうすぐ、もうすぐこの檻から抜け出せる。

「ん……？」

そんなとき、奇妙な反応を感知した。それは結界。

巧妙に隠されてはいるが、認識阻害と人払いの効果を持つそれが展開された。

（侵入者か……だが、その割には何かおかしい）

ここは檻ではあるが、しかし彼女の目が行き届く絶対の縄張りでもあった。

いわば、全てに彼女の色が塗られたキャンパスのようなもの。そして、侵入者はそこに追加された全く違う色であり、認識阻害等の結界はそれを更に広げるものとなる。

そして、得てして侵入者は^{異色}麻帆良を^{周囲の色}移動する。^{浸食する}

ある者は図書館島の貴重な魔導書を狙い、ある者は神木・蟠桃を^{極東の姫}狙い、またある者は大事に大事に守られた秘中の玉を狙うために。

（移動していない？ いや、移動する気がないのか？）

だが、これは異色だった。ただそこにあり続けるだけ。通常のパターンでは考えられない。

別の目的があるのかと思考してみるが、結界の発生地点は麻帆良の外れ、その森の中。敢えていうなら、侵入者の迎撃用のために、わざと開かれた広場である。

霊的価値があるわけがなく、拠点にする意味もない。当然物的価値等あるはずもない。

色々な予想が浮かんでは消えていく。どこまでいっても想像の域

を出ないそれに業を煮やし、エヴァンジェリンはすぐさま起き上がると、水晶玉を取り出した。

同時に魔力を込め、水晶玉に刻まれた術式を起動させる。

それは遠見の魔術。魔力さえ封印されていなければ、こんな水晶^{オモ}玉に頼らなくても、資格だけを飛ばすことなど造作も無いのだが、今ではこのざまだ。

現実と、呪いを掛けたまま死んだナギに対する苛立ちを―悲しみも少し交えながら―募らせつつ、水晶玉の力と自身の技量によって、認識障害の結界を潜り抜け、内部を映し出す。

（な、こいつは……！！）

そこに映っていたのは、赤い髪と赤い僧衣を纏った少女と、右半分が緑で左半分が黒の戦士が戦う姿。そしてそれを観戦して居るであろう黒いロングコートを身に纏った少年と、黒いメイド服を身に纏った、黒髪の少女。

赤のシスターの少女と、黒のメイドの少女、そしてコートの少年には見覚えがなかったが、緑と黒の戦士の姿は知っていた。

どこからともなく現れて、異様な魔力を発する怪人と戦う謎の戦士。そのシルエットから女性であることは判断できるが、それ以上の情報は一つを除いて何もない、正体不明の存在。

それは麻帆良学園都市内で噂される。

街を泣かせる者がいるならば、風と共に現れて、街を泣かせる者

と戦い、そして風と共に去っていく戦士。

（仮面ライダー……W）

表に出てしまい、魔法使い達が力を振るうのを躊躇う場所にも現れ、か弱い住民達のためにその力を振るっていた。そして、その姿と強大な力故に、血気盛んな魔法使い達が勝手に化け物と認定して、交戦したという報告を聞いたこともある。

交戦したもののたちの悉くは敗北の味をたっぷり味わってきたようだが。

それが、赤い僧衣の少女に向けて鋭い跳び蹴りを放った。過去の記憶を探る限り、その一撃はコンクリすら破碎する一撃のはずであるが、何ら躊躇う様子は見られず。

しかし、赤い少女が両腕を交差し、しかし耐えられないと判断したのか、直撃の瞬間後方へと跳躍してダメージを軽減し、受けきって見せた。

腕を擦る仕草から、ある程度ダメージはあるようだが、戦闘に支障があるようには見えない。

（あの一撃を受けきると？ 何者だ、コイツは？ 魔法使いには見えんが）

普通に考えたらあり得ない少女の姿に、エヴァンジェリンは少しの疑問を覚え、しかし次の瞬間、

（何だ、この魔力は！？ コイツ、本当に人か！？）

彼女の体から、まるで火山の噴火のように吹き上がる魔力の量に戦慄する。それは封印解放状態の彼女にすら匹敵するもので。

（ククク、面白い。何処の誰かは知らんが、いい暇つぶしが出来た）

あの強大な魔力を放つ赤の少女と、その関係者と思われる少年と黒の少女に興味が湧いた彼女は、遠見の魔法を解除すると、触媒となる魔法薬とマントを召喚魔法で呼び出し、すぐさま屋上から飛び立った。

S I D E O U T

S I D E : M A I T O " K A G U R A

翔子達―仮面ライダーWと一姫の戦闘を黙って見守っていた舞人は、自分が張った結界に干渉する存在に気付いた。そして、それが遠見の魔術に類するものと判断すると、まずは隣に立つ黒の少女へと声を掛けた。

「詩音、気付いているか？」

「勿論です」

自身の問いに対し、すぐに返答がある。

「何らかしらの行動があつた場合、詩音は翔子と一姫を守れ。方法は任せる。俺はリンスの方に行く」

「了解しました」

詩音へと指示を出し、了承の返事を聞くと、自分はそのまま木陰で横になっているリンスの方へと静かに移動する。

幸いそれほど距離は無く、あと数メートルの距離まで詰めたとき、奇しくも翔子と一姫が握手をした瞬間。

（侵入された！？）

事前に魔導具に設定しておいた警報が脳内に鳴り響き、侵入者の存在を告げる。

魔導具から伝えられる情報を元に、その方向へと視線を向けると、視界に映るのは、黒いマントを羽根のように広げた金髪の少女。

そして、ガラスの破片のきらめきと共に飛来する、

（魔法の射手！！いきなり撃ってくるだと！？）
サギタ・マギカ

強力な氷の属性を帯びた魔法の射手が二方向へと放たれる。

一方はリンスに、もう一方は翔子と一姫に。

「二人とも伏せなさい！！」

詩音が一姫と翔子の前に現れ、クリスタルの様な形状の障壁を展開するのが見えた。

あれで翔子達は大丈夫だろう。

あれを破るのはそう簡単には出来ない。あれを魔法の射手で破ろうと思うなら、伝説の傭兵ジャック・ラカンのバグキャラ級の力でも無い限り不可能だ。少なくとも、この魔法の射手にそんな人外な魔力は込められていない。

だから、舞人は自分のことに集中する。

気を集中し、瞬動術で一気にリンスの前に立つ。同時に懷から一枚の札を取り出し、

エーミット・レフレクシオー
「解放・光楯」

呪文を唱え、護符に込められた呪文を起動する。込められていたのは光楯。ダンプカーの直撃すら耐えるそれは、こちらへと飛来する魔法の射手を防ぐのには十分。

展開された光の楯に氷の矢がぶつかり、空気中へと結晶が飛散する。魔法の射手に込められた氷の魔力が、光楯の周囲を凍結させるが、こちらにはこれといった被害はない。

舞人はそれを確認すると、改めて魔法の射手が飛来した方向へと視線を向けた。

「さて、あの強力な反応が一つ減っているのは残念だが……その見知らぬ三人。少し話を聞かせてもらうぞ？ 大人しくしていれば、命までは取らない」

抵抗すれば、その限りではないがな、と続ける金色の少女。その不適な笑みと圧倒的な威圧感、杖を使わずに宙に浮く技術から、彼女がかなり凄腕の魔法使いであることが知れる。その割には感じる魔力が少ないのは疑問ではあるが……現時点ではあまり関係ない。

それよりも、舞人は彼女の姿にどこか見覚えがあった。過去にどこであった……という訳ではなく、写真か何かの記憶媒体で姿を見た記憶がある。

そこに、先ほどの氷の魔法の射手。そして黒いマントに金色の長い髪。浮遊術を行使するほどの卓越した魔法技術という、パズルのピースが当てはまる。

同時に頭を過ぎる嫌な予感。

「まさか……ダーク・エヴァンジェル闇の福音か!？」

「ほう……私のことを知っているか。先ほどの護符と良い、貴様は

魔法関係者か」

思わず口に出した呟きに、少女が答える。とてんも聞きたくない
答えではあったが。

今後の展開を予想し、すぐさま決断する。

「翔子、リンス。二人とも今すぐここから離れろ」

「えっ!？」

「なんで!？」

後ろにいるリンスと、詩音に守られている翔子が驚きの声をあげる。

「相手が悪い。悪すぎる。俺たちだけなら何とかなるが、お前達を
守るとなるとかなり厳しい」

「なら私たちもへんし……」

「それをしてたら、きつとお前達は『魔法使い』たちに狙われる。お
そらく、今のような生活はできない」

「っ……!!」

そう。『仮面ライダー』に变身できる彼女達を、魔法使い達は放
つておかないだろう。その力を正義と^{世のため、人のため}いう、自身の力を誇示する戯
れ言のために振るえと。

そして、それに反した瞬間、彼女達は悪として、奴らに裁かれる。その強大な力故に。

今までの歴史で駆逐されてきた魔獣達のように。

「でも……!!」

「悪い。問答してる時間も惜しいんだ」

翔子が口を開くより早く、舞人は懷から白い立方体を二つ取り出すと一つはリンスへ文字通り押し付け、もう一つは翔子へと投げ当てた。

その瞬間、二つの立方体はルービックキューブを解くように回転し、球場の結界を展開する。ちょうど人間一人分が入るほどの大きさのものを。

「……、……!!」

「……、……!!」

翔子とリンスが結界に包まれ、そしてその意味を悟り、内側から力強く叩くも、既に音さえ聞こえない。

これは舞人の作成した魔導具の一つ。効果は、特定の部分が触れた相手を結界内に取り込み、対となる装置が置いてある地点へと転送する。

そして、対となる装置は、翔子とリンスの探偵事務所へと置いてきてある。

一回きりの使い切りの道具だが、今回はこれで十分。

数秒後には結界ごと、翔子とリンスが転送された。

「お芝居は終わりか？ それそろ私とダンスを踊って欲しいんだがな？」

それまで黙って成り行きを見守っていたエヴァンジェリンが、口元を弧に歪めながら、こちらを見下ろしている。

わざわざ待つてくれる辺り、律儀なのか、強者の余裕か、それとも別の理由があるのか。

「私がお相手いたしましょうか？ 闇の福音？」

それに応じるように、詩音が一步前へと踏み出した。

「ふん、付いてこれるか？」

エヴァンジェリンがその小さい手から、液体の入ったフラスコを二つ投擲、

「氷の17頭。集い来たりて敵を切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の17矢」
セリエス・グラキアリス サギタ・マギカ

彼女の呪文に反応して、触媒から魔法の射手が放たれる。

その数17本。

それは複雑な軌道を描きながら、しかし全て詩音へと向かってい

く。

「……」

しかし、詩音はその場から一步も動かない。ただ静かに両手を広げる。

その瞬間、彼女の周囲に六角柱の障壁が、詩音の周囲へとそびえ立った。

着弾する魔法の射手。大気がひび割れるような凍結音が響き渡るも、その障壁は揺るぎもしない。

「なるほど、少しは楽しめそうだ。せいぜい長く付き合ってもらおうぞ」

「失礼ながら」

詩音は展開した障壁を消すと、エヴァンジェリンへと頭を下げる。

そして、それに対し、怪訝そうに眉を潜めるエヴァンジェリンに向かって、

「この後の予定も詰まっておりますので、早めに切り上げさせていただきます。ただこうと思います。さあ、どうぞ。先手は譲りますよ?」

その白い右手を、手の平を上に向けて突き出し、掛かってこいと挑発した。

しばらくの間、理解できなかったのか、エヴァンジェリンは硬直

していたが、

「この私に掛かってこいだと……?」

やがてその小さい体をぶるぶると怒りに震わせ、

「お望み通りにしてやろう!! 後悔するなよ、小娘え!!」

両手一杯に抱えた、魔法薬の詰まったフラスコを構え、詩音へと向かっていった。

t o b e c o n t i n u e d

第四話 Eとの遭遇 / 魔法使いとご対面（後書き）

どうも、作者のてんしんです。

読者の皆様、『規格外品達の踊る舞台は』第四話、いかがだったでしょうか？

今回は非常に難産でした。特に学園結界と、エヴァンジェリンの関係が難しかったです。

リアルに仕事が忙しかったのもありますが。

今度はもっと早く更新できるよう、頑張ります。

それでは、本日はこの辺で失礼します。

ご意見、ご感想、リクエストなど随時募集していますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0874q/>

規格外品達が踊る舞台は

2011年10月7日21時44分発行